地域づくりハンドブック

つながる。広がる。地域づくりの輪

熊本県

地域づくり参画に必要な情報をこの一冊に
プロセスと事例を知って、いざ実践！

「熊本県地域課題解決プロデューサー人材活用事業」は、地域づくりに取り組む任意団体や法人（地域団体）に対して、活動の強化、事業計画策定、人材育成、経営基盤の強化などを支援する地域課題解決プロデューサーを派遣しアドバイスを行う、伴走型の支援事業です。

本事業の取り組みの一環として作成した地域づくりハンドブック「つながる。広がる。地域づくりの輪」では、これから地域課題解決や地域活性化のために団体をつくりたい皆さん、活動をはじめたけれど運営面で課題に直面している皆さんのために、団体設立やその後の運営に必要なさまざまなプロセスを分かりやすく解説しています。

また、本事業でこれまでに伴走支援を行ってきた 16 団体の取り組み事例も紹介します。地域づくりに関わる方々に役立つ情報が詰まっていますので、ぜひ参考にしてみてください。

地域づくりハンドブック

つながる。広がる。地域づくりの輪

Contents

P3　地域課題解決プロデューサー人材活用事業・総合プロデューサーあいさつ①（株）一平ホールディングス 代表取締役社長　村岡 浩司氏
P4　地域課題解決プロデューサー人材活用事業・総合プロデューサーあいさつ②　熊本県立大学環境共生学部 教授　柴田 祐氏
P5　地域づくりを始めるにあたって
P6　地域づくり団体の新設 −その 1 − 目標設定
P7　地域づくり団体の新設 −その 2 − 合意形成
P8　地域づくり団体の新設 −その 3 − 賛同者集め
P9　地域づくり団体の新設 −その 4 − 組織化・規約策定
P10　地域づくり団体の新設 −その 5 − 資金調達
P11-12　活動発展のイメージ
P13　県内の地域づくり団体・事例紹介
P14-15　事例紹介 01　一般社団法人パレット
P16-17　事例紹介 02　美里 COcCARU（こっかる）
P18-19　事例紹介 03　一般社団法人のあそび labo
P20-21　事例紹介 04　走潟マルメロ会
P22-23　事例紹介 05　一般社団法人らぞ LABO
P24-25　事例紹介 06　NPO 法人網田倶楽部
P26-27　事例紹介 07　菊鹿さきもり隊
P28-29　事例紹介 08　熊本地震・平田震災遺構保存会
P30-31　事例紹介 09　坂より上自治会
P32-33　事例紹介 10　一般社団法人川尻まちづくり
P34-35　事例紹介 11　株式会社しいやま
P36-37　事例紹介 12　一般社団法人看護のココロ
P38-39　事例紹介 13　NPO 法人きらり水源村
P40-41　事例紹介 14　一般社団法人アコウプロジェクト
P42-43　事例紹介 15　一般財団法人たらぎまちづくり推進機構
P44-45　事例紹介 16　立野わかもん会
P46　地域づくりに役立つ情報ページ

One Kyushu！ 九州はひとつ

ともに、ローカルの価値を見つける旅に出ましょう！

私にとって、地域への興味というのは、すなわちそこに住む「人」への興味に他なりません。熊本をはじめ九州各地には、まだ活かされ切っていない資源や人材が数多く眠っています。時に農業の産地を訪ね、時にものづくりの現場を訪れ、そして、そこで人の営みを感じる。私は、そうした旅を通して「九州アイランド」という概念に辿り着きました。

九州をあたかも一つの島であると考えて広域経済圏として捉え直し、無数に存在する宝物のような価値を紡ぎ合わせることで、「世界があこがれる九州をつくる」ことに挑戦しています。宝物とは「人」であり、彼らの出会いの偶発性をデザインすることで、九州の未来創造につながる発見やイノベーションが生まれてくるのです。

今こそ、「ローカル」という言葉の再定義が必要だと思っています。それは「地方」と「都会」という二元性 (上下意識) のある単純な翻訳ではなく、そこにしかない「唯一無二の価値」であり、地元の人々が愛し、誇りに思えるような存在のことです。

本事業を通じて、数多くの志あふれる皆さんとの出会いがありました。そして、これからのそんな出会いがあることを心から楽しみにしています。ともに、ローカルの価値を見つける旅に出ましょう！　One Kyushu ！

地域課題解決プロデューサー人材活用事業
総合プロデューサー

（株）一平ホールディングス代表取締役社長
村岡　浩司 氏

小さく始めて

大きく育てる

地域づくり活動は“楽しむ”ことから
取り組みの一つ一つが“渦”を生み出す

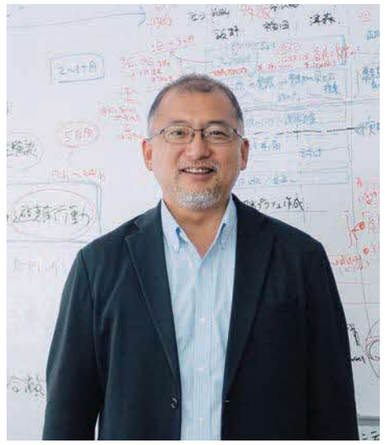
「地域づくりとは？」と問われると、一言ではなかなか説明しづらいものですし、人によっても考え方がさまざまです。その一方で、多くの人と一緒になって取り組まなければならないのが地域づくりです。また、人手の確保や意識の醸成の難しさなど、地域づくりをめぐる課題は大きく、深く、その解決には小手先の対応ではどうにもならない場合も多くあります。

私たちは今、地域づくりの大きな構造変化の真っただ中にいます。確かに人口減少と高齢化の進行とともに地域づくりの担い手となり得る人の数は減ったかもしれませんが、活き活きとした取り組みの小さな渦が各地で起こっています。このハンドブックで紹介している地域団体でも、日頃からの地域におけるつながりの中で、楽しみながら取り組みを行っています。まさに、そうした活動の一つ一つが地域づくりの“渦”になっています。

さらに、地域外を含むさまざまな人とのネットワークによって渦と渦の刺激のし合いが生まれ、さらに新たな渦が生まれていきます。それによってたくさんの小さな渦で地域全体が満たされていき、結果的に豊かな地域、住んで良かったと思える地域になっていく、そんな地域づくりの新たな姿が見えてきた気がします。

一方で、地域にとって大切なことであっても、課題が大きすぎると解決は難しく、義務感だけでは多くの人の共感は得られません。結局、やっている人自身が楽しんでいるところに人は集まりますし、楽しく活動するためには、その活動に意義と意味をみんなで共有することが必要です。また、小さくてもよいので成功体験が飛躍のきっかけにもなりますし、小さくはじめて大きく育てることがポイントだと思います。

このハンドブックで紹介している地域づくり団体の組織・つながりづくりや、県内各団体の事例を参考に、皆さんの地域での取り組みも地域づくりの小さな渦の一つとして、より充実した活動としていくきっかけになればと思います。

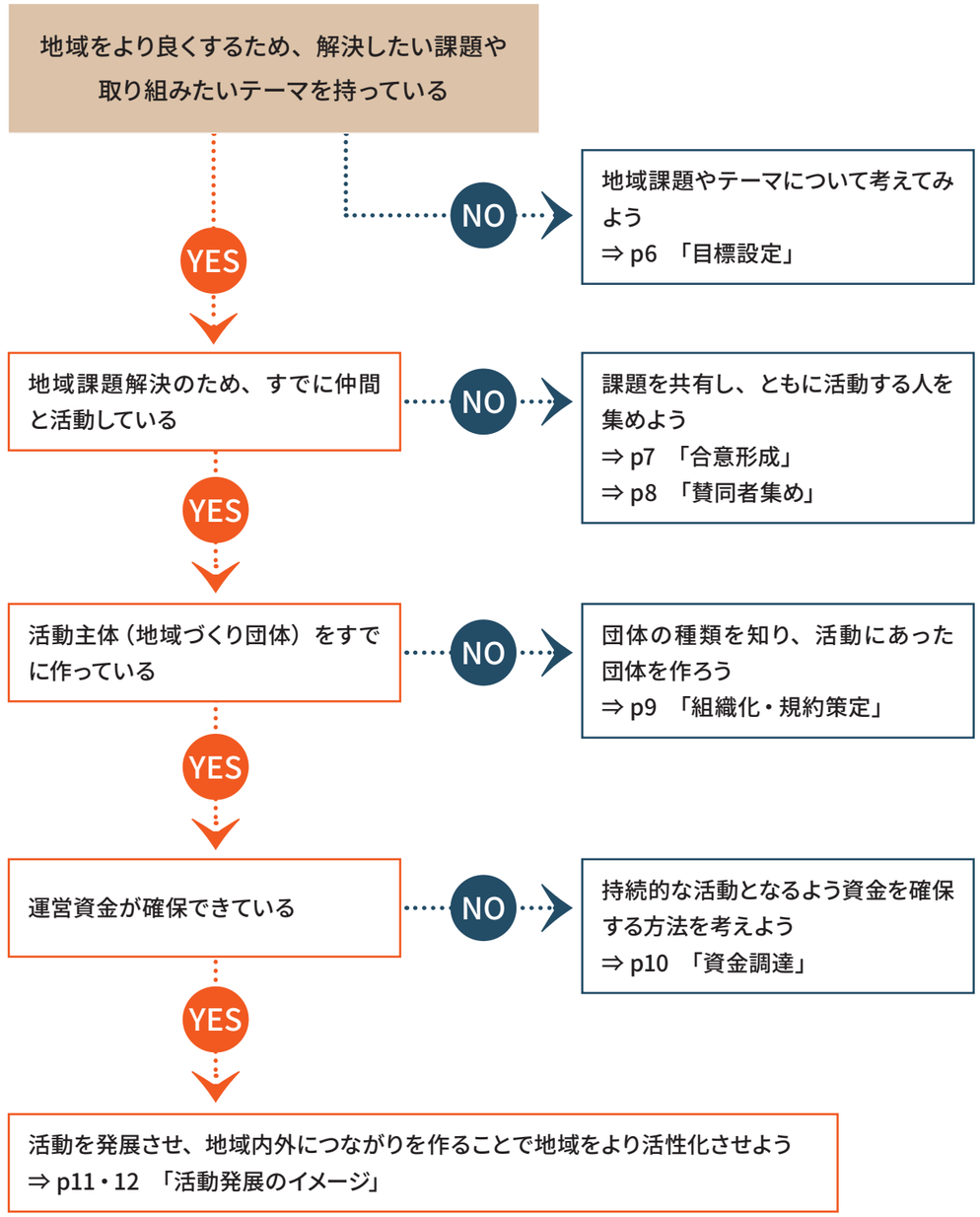


地域課題解決プロデューサー人材活用事業
総合プロデューサー

熊本県立大学環境共生学部教授
柴田　祐 氏

地域づくりを始めるにあたって

皆さんが「地域づくり活動を始めたい」と思っても、「どんな課題に取り組むのか？」「すでに一緒に取り組む仲間がいるのか？」など、状況や段階によって、“やるべきこと”が異なります。下のチャートを参考に、自分または自分たちの団体が、今どの部分に力を入れるべきかを確かめてみましょう。



地域づくり団体の新設 －その１－ 目標設定

自分たちの手で新たに地域づくり団体を設立しようとする時、まず大切なのは「何をしたいのか」「それによって、地域やそこに住む人々にどうなってほしいのか」など、目標を設定することです。そのために押さえておきたいポイントや、目標を明確化するための手法を紹介します。

「自分たちのやりたいこと（目標）」を言語化しよう！

目標設定は団体設立のスタート地点

地域づくり団体を新設しようとする際、その“スタート地点”となるのは団体としての目標設定です。明確な目標設定のないまま団体を立ち上げてしまうと、メンバーそれぞれの考えや目指したいゴールが共有されず、団体としての方向性が定まりにくくなります。また、地域住民など外部の人たちからの賛同や共感を得ることが難しくなり、協力や支援を受けにくくなる場合があります。

そうならないために、活動のテーマややり方、自分たちの活動によって何をどう変えていきたいのかなど、目標を言語化しておくことが重要です。その際、下のような３つのポイントを押さえておきましょう。

「目標設定」の際に押さえておきたい３つのポイント

❶ 解決したい地域や社会の課題を見つける
❷ 自分たちや地域の強み（財産）・弱み（課題）を整理する
❸ ❶・❷を組み合わせて言語化する

「目標」を言語化するのに大切なのは？

メンバーで話し合い、３つのポイントに沿って自分たちの取り組むべき課題や強み、具体的な活動案を洗い出しながら目標設定を行っていきます。特に、「当事者 / 受益者（誰が・何が）」「目指す状態（どうなってほしい・どうしたい）」「活動エリア（どこで）」を盛り込みましょう。そのうえでこれらをまとめた一文「ビジョン」を作成します。ビジョンは、伝わりやすさを考慮し、シンプルで明確な文章にすることを意識しましょう。

言語化・ビジョン作成の例

当事者（受益者）	＝市民および周辺自治体の住民（特に若い世代）に
目指す状態	＝地域の魅力が共有され、まちに賑わいのある状態
活動エリア	＝市内各地（駅前・山間地・海沿いなど、魅力を引き出した地域全般）
活動内容	＝地域の魅力を発見し、イベントとして域内外に発信。運営を通して地域にお金が落ちる仕組みを創出する
ビジョン（上記のまとめ）	＝地域の魅力を再発見し、その発信活動を通して地域に関心を持つ人を増やし、賑わいのあるまちづくりに貢献する

地域づくり団体の新設 －その２－ 合意形成

地域づくり団体のスタートに当たって重要なポイントの一つが、メンバーや支援者の間の合意形成です。活動内容や目指す方向などを“見える化”し、メンバー間の目線合わせをしましょう。

ビジョンの“見える化”で常に目線合わせを

設立時だけでなく、活動中の方向性の再確認にも役立つ

団体として活動する場合、そこにはさまざまな考えを持った人たちが集まります。スムーズな団体運営を行っていくため、団体内でどのように合意を形成し、方向性を共有していくかが重要です。

合意形成の際に有効なのが、前頁「−その１−目標設定」で定めたビジョン、課題や目標、強みや弱みから導いた活動の方向性などを要約してシートに記入し、共有しておくことです。さまざまな意見を集約しながら決めた内容をシートとして可視化しておけば、「団体がどのような方向に向かおうとしているか」が明確になります。また、活動開始後に意見が分かれた時にも、シートを見返すことで方向性の再確認を図ることができます。作り上げたビジョンは、団体の内外を問わず、さまざまな機会で共有することが大切です。メンバーや支援者、協力者などが、「自分ごと」と受け止められるよう意識的に発信していきましょう。

“見える化”シートを作る〜合意形成のポイント〜

◉活動の目的・目標を明確化し、いつでも確認できる状態にする
◉関係者が「自分ごと」と受け止められるよう意識的に共有する

“見える”化シートの例

●組織の目標

活動エリア：市内各地（駅前・山間地・海沿いなど、魅力を引き出した地域全般）
で
当事者（受益者）：市民および周辺自治体の住民（特に若い世代）に
が
目指す状態：地域の魅力が共有され、まちに賑わいのある状態
となるために

活動内容：地域の魅力を発見し、イベントとして域内外に発信。運営を通して地域にお金が落ちる仕組みを創出する活動
を行う

●活動の強み・弱み

		内　容		意識する方向性
地域	強み	魅力ある景観、農産物	⇨	域内外に広く知ってもらう（情報発信、体験）
	弱み	高齢化	➡	域外から協力・参加できる仕組みを作る
団体	強み	地域住民主体での活動	⇨	より精度の高い課題解決を模索する
	弱み	メンバーが少ない	➡	ビジョンを共有し、活動の賛同者を増やす

●財源
・自主事業（町歩き・山歩きイベント）
・助成金（中山間地振興）

●組織
・NPO 法人

状況に合わせ、目標を変化・進化させていく

当事者（受益者）の状態や周辺環境の変化によって、ビジョンも変化・進化させていく必要があります。「作って終わり」ではなく、定期的に見直す機会を設け、目線合わせを行いましょう。

地域づくり団体の新設 －その３－ 賛同者集め

持続可能な活動を目指す上で、メンバーを増やすことはもちろん、外部からのさまざまな支援や協力を得ることも不可欠です。そのためには、団体の目指す方向性や活動内容に賛同してくれる“ファン”を増やすことが重要。また、「−その１−目標設定」で定めたビジョンを折に触れて外部にも発信し、団体の活動や考え方について、周囲に共感・賛同してもらえる機会を作りましょう。

賛同者集めの第一歩は、「知ってもらう」ことから

立場や関わり方もさまざまな「賛同者」

「賛同者」とひと口に言っても、その立場や関わり方はさまざまです。まずは、直接的に団体の活動に参加してくれるメンバーや会員。次に、ボランティアや寄付を通じて関わってくれる地域住民や地元企業。さらに、同じような趣旨や目的で活動している他団体や、地域づくり団体の支援を行っている行政機関や社会福祉協議会などです。

そうしたさまざまな人や団体等に、あなたの団体の活動に賛同してもらうには、まず活動やそれにかける思いを知ってもらうことが重要です。そのためのいくつかの手法を紹介します。

“つながり”を
増やすことで
活動の幅も広がる！

◉イベント等で認知度向上と参画の機会を

周囲に活動を知ってもらうためには、「話題（話のネタ）」を作りましょう。講演会やセミナー、マルシェ、ワークショップなど、活動に沿ったイベントを実施し、団体の存在や活動をアピールしましょう。その際、運営の協力を取り付けることで、より深く関わってもらえる賛同者を獲得することもできます。

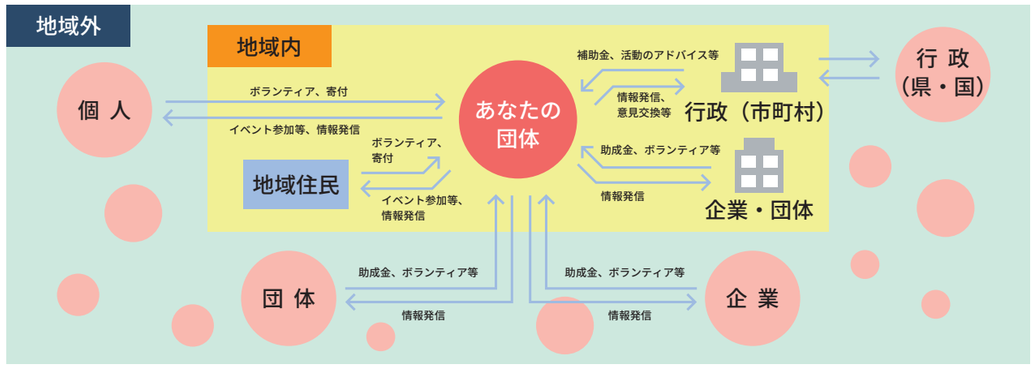
◉地域行事や他団体の催しに参加する

日頃から、活動の拠点となる地域での催しに関心を持ち、情報収集をしましょう。地域づくりに関するイベントや祭りなどの地域行事、活動内容の近い団体の催しに積極的に参加するなど、他の活動に「巻き込まれる」ことで、自団体の活動やメンバーの顔を周囲に覚えてもらいましょう。

◉ SNS 等を活用して情報発信を行う

地域の枠を超えてより多くの賛同者を得ることができる上、つながりを持続していくのにも有効なのが「SNS(Facebook、X（旧 Twitter)、LINE など)」です。団体の活動を PR する情報発信手段としてだけでなく、連絡ツールとしても使えるので、積極的に活用してみましょう。また、他団体の活動を知るツールとしても役立ちます。

賛同者集めのイメージ



地域づくり団体の新設 －その４－ 組織化・規約策定

設立する団体の形態は、目指す方向性や活動範囲によってさまざまな選択肢があります。「どのような形が一番活動しやすいか」を意識して形態を決めるとともに、運営実務をスムーズに進めるための規約などを定めていきましょう。

自分たちの団体に合った形態や規約をしっかり見定めよう

必要に応じて法人格の取得も

地域づくり団体の主な形態として、法人格を持つ特定非営利活動法人（NPO 法人）、一般社団法人、法人格を持たない任意団体などがあります。必ずしも法人格は必要ではありませんが、例えば、不動産などの資産を保有したり、行政や企業と契約行為を行ったりする場合、法人格を持っていることでスムーズに進む場合があります。それぞれの特徴を理解し、自分たちの団体に合った形態を見極めましょう。

また、どんな形態の組織で活動するにしても、団体としての決まり事＝規約を作っておくことが欠かせません。特に、NPO 法人や一般社団法人を設立する場合には、団体の定款が必要です。規約は、日頃の運営や意思決定を行うため、また組織の透明性を確保するためにも重要です。法人格のない任意団体として活動する場合であっても、できる限り作っておくようにしましょう。

法人格によって何が違うの？

自分たちの活動や目標に合わせて、
どんな組織にするかを決めましょう！

組織形態	特定非営利活動法人（NPO 法人）	一般社団法人	任意団体
根拠法	特定非営利活動促進法（NPO 法）	一般社団法人及び一般財団法人に関する法律	なし
性格	非営利	非営利	営利／非営利
目的事業	特定非営利活動（NPO 法別表の 20 分野）を主目的	目的や事業に制約はなく、公益事業、収益事業、共益事業等可能	任意
設立方法	所轄庁の設立認証後に登記して設立	公証人役場での定款（非営利性が徹底した定款）認証後に登記して設立（準則主義）	任意
設立要件	社員 10 人以上（常時）	社員 2 人以上	任意
税制等	収益事業課税	収益事業課税	収益事業課税
法定設立費用	無料	11 万円	無料
その他	毎事業年度の事業報告書等提出等、NPO 法に基づく所轄庁（都道府県知事又は指定都市の長）の監督を受ける		

地域づくり団体の新設 －その５－ 資金調達

地域づくり団体を運営していく上で、活動やビジョンと並んで欠かせないのが財源です。営利を求めない活動であっても、発生するさまざまな費用をメンバーが負担する形では、持続的な運営や後継者の確保が難しくなる場合があります。財源の種類や確保の方法を知っておきましょう。

団体の理想を実現するために欠かせない“財源”の確保

財政基盤安定のためには自主財源が重要

地域づくり団体の財源としては、①会費・寄付、②助成金・補助金、③自主財源（事業収入等） などがあります。「①会費・寄付」は、団体の理念や活動に共感する人たちからの支援的な財源です。「②助成金・補助金」は、企業や民間の助成団体から提供される資金（助成金等）や行政から提供される資金（補助金等）のことで、団体の取り組みに対する支援や地域課題解決のために活動する団体の育成などを目的としたものです。

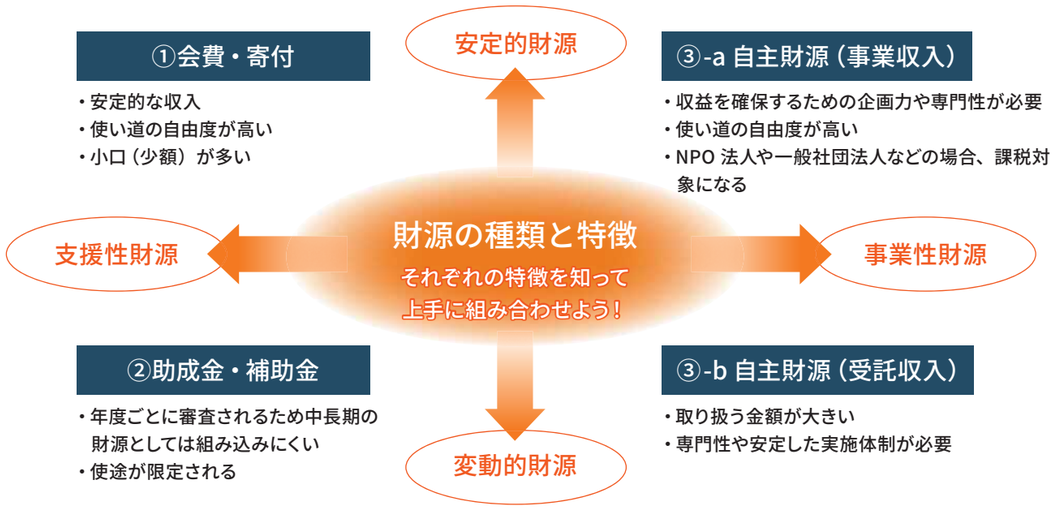
これに対して「③自主財源」は、団体自らサービスの提供やイベント、物品販売などを行って収益を得る事業収入（③-a）や、公共施設の指定管理業務を受託することなどで得られる受託収入（③-b）のことを指します。また、最近では広く一般に資金を募るクラウドファンディング※も、自主財源の一つといえます。自主財源の獲得には多くの手法がありますが、団体の活動や目的に沿った形で無理なく獲得できることが理想です。

団体の活動を持続的に行っていくためには、いずれかに偏ることなく、バランス良く組み合わせて財源を確保することが重要です。特に自主財源の確保は、自立した活動継続のために欠かせない要素なので、団体内でしっかりと話し合いましょう。

check!

※ 支援者に広く資金協力を呼び掛ける「クラウドファンディング」

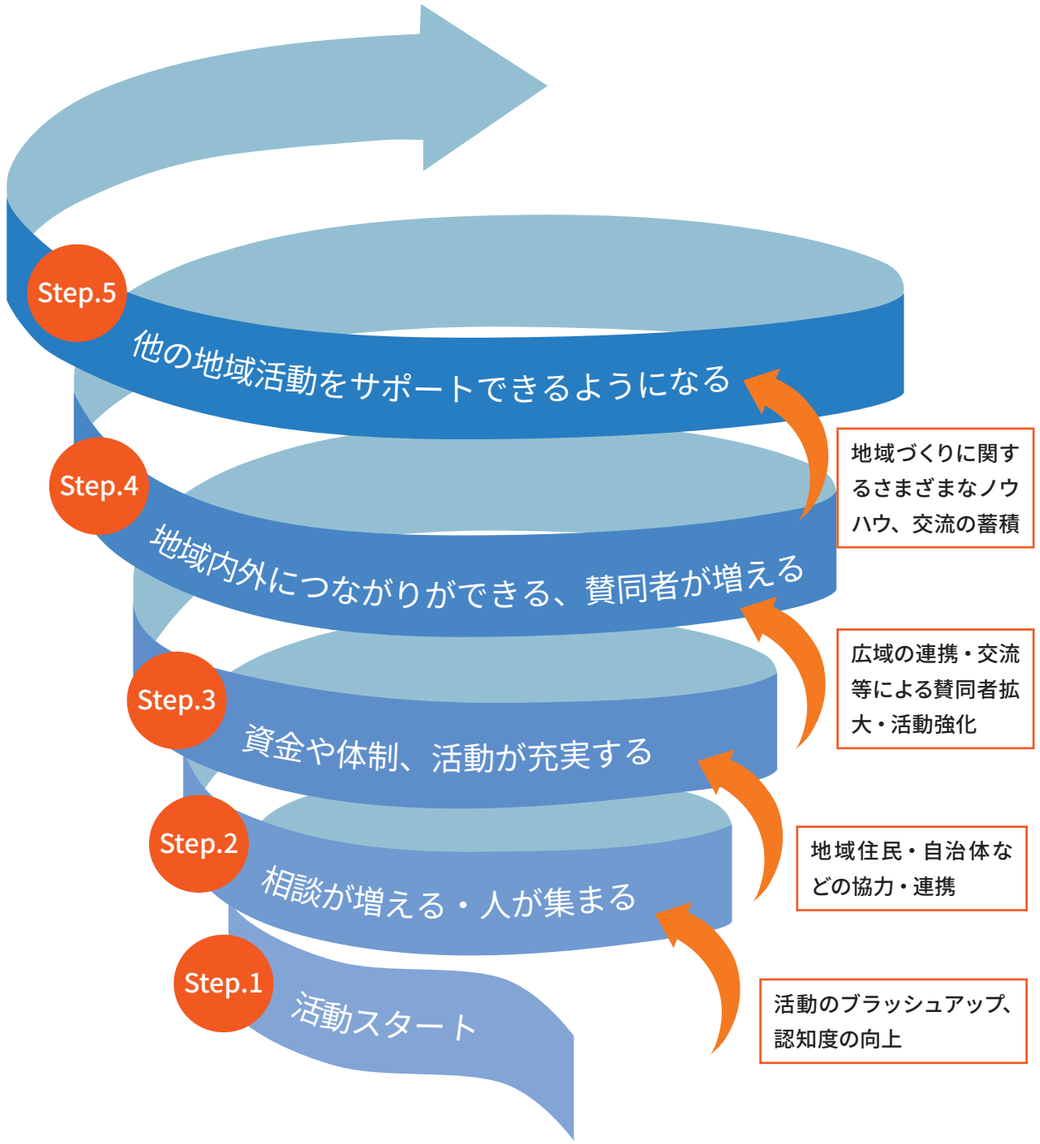
近年、新たな資金調達の仕組みとして注目されている「クラウドファンディング」。「群衆（クラウド）」と「資金調達（ファンディング）」を組み合わせた造語で、「インターネットを介して不特定多数の人々から少額ずつ資金を調達すること」を指します。新しいサービスを提供したい人や社会課題を解決したい人などが資金の提供を呼びかけ、それに共感した人たちが資金面で支援する仕組みです。市場の拡大とともにその形式も多様化し、現在は「寄付型」、「購入型」、「融資型」、「株式型」、「ファンド型」、「ふるさと納税型」などがあります。



活動発展のイメージ

自分たちが起こした“渦”を少しずつ大きく！

地域づくり団体を立ち上げるということは、地域の中に小さな“渦”を起こすことです。そして活動の発展は、その渦を少しずつ大きくしていくことで達成されます。どのような段階を経て渦が広がっていくのか？　それをイメージしたり、分かりやすく可視化しておくと、自分たちの団体の現在地や、そこから発展させるために必要なことが見えてきます。



活動発展のイメージ

Step.5 他の地域活動をサポートできるようになる

それまでの活動や他団体とのつながりなどを通じて地域づくりに関するさまざまなノウハウが団体内に蓄積されると、これから新たに立ち上げる団体や活動が停滞している団体など、他の地域活動のサポートやアドバイスができるようになり、地域づくりの輪がさらに広がります。

Step.4 地域内外につながりができる、賛同者が増える

活動エリアの拡大やイベント開催などを通じて地域の内外で団体の認知度が高まると、同じような課題に取り組む団体との地域の枠を超えた連携や交流が生まれます。そうしたつながりがより広く、深くなるほど、新たな賛同者も増え、さらに団体の活動や体制が強化されます。

Step.3 資金や体制、活動が充実する

規模や活動範囲が広がると、徐々に団体としての信頼度が増し、地域住民はもちろん、団体が拠点を置く自治体などの協力や連携が得られやすくなります。加えて、メンバーの増加とともにイベント開催等の自主事業なども行えるようになり、補助金や助成金だけに頼らない活動資金の確保も可能になります。

Step.2 相談が増える・人が集まる

団体の存在や活動内容が浸透してくると、地域住民や他団体などからの相談事が増えていきます。また、趣旨に賛同し、「自分も参加したい」「メンバーに加わりたい」という人も現れ、団体の規模や活動範囲が少しずつ広がっていきます。

Step.1 活動スタート

団体としての活動をスタートさせたら、同時に実際にやってみて見えてきた課題や改善点を洗い出し、活動のブラッシュアップを行っていきましょう。さらに、より多くの人に活動を知ってもらうための情報発信なども積極的に行い、認知度向上に努めましょう。

県内の地域づくり団体・事例紹介

01

一般社団法人パレット
（甲佐町）

02

美里 COcCARU（こっかる）
（美里町）

03

一般社団法人のあそび labo
（荒尾市）

04

走潟マルメロ会
（宇土市）

05

一般社団法人らぞ LABO
（人吉市）

06

NPO 法人網田（おうだ）倶楽部（くらぶ）
（宇土市）

07

菊鹿さきもり隊
（山鹿市）

08

熊本地震・平田震災遺構保存会
（益城町）

09

坂より上（かみ）自治会
（八代市）

10

一般社団法人川尻まちづくり
（熊本市）

11

株式会社しいやま
（山鹿市）

12

一般社団法人看護のココロ
（合志市）

13

NPO 法人きらり水源村
（菊池市）

14

一般社団法人アコウプロジェクト
（天草市）

15

一般財団法人たらぎまちづくり推進機構
（多良木町）

16

立野わかもん会
（南阿蘇村）

※各団体の事例紹介のページでは、取り組んだ課題や活動の内容を分かりやすく「＃（ハッシュタグ）」で表しています。皆さんの活動に合った団体を見つけるのに役立ててください。

「できること」「続けられること」から一歩ずつ！

01 一般社団法人パレット

＃情報発信
＃交流拡大
＃資金調達 (自主事業)

レストラン事業などを手掛け、地域の定住人口増を目指す

■団体概要

組織名　一般社団法人パレット
所在地　上益城郡甲佐町横田 605-1
代　表　大滝祐輔
会員数　スタッフ：正社員 7 名／アルバイト 17 名
設立年月　2018 年 4 月

■主な活動内容

地元の若手商工業者や移住者などを中心に設立。「交流人口や滞在人口を増やし、それをキッカケに定住人口増加につなげていく」との考えの下、甲佐町役場などとも連携を図りながら、宿泊事業をはじめ、飲食事業や、アクティビティの構築、各種イベントなど、さまざまな取り組みを行っています。また、県内他町村との連携も図り、町内のみならず県全体の魅力も発信しながら滞在のハブとしても訪れてもらっています。

地域および団体の課題

「パレット」は、活動拠点である甲佐町の商工業者が中心になって設立した地域おこし団体です。日頃から自分たちの商売を通して、地域の高齢化や人口減少と、それに伴う商店街などの賑わいの低下を肌で感じています。
団体としての活動を行うに当たっては、単に「地域に賑わいを生む」という一過性の取り組みだけでなく、将来にわたって持続可能な地域であるために不可欠な移住定住の促進を目標に掲げています。

今後、移住者が増えてより多くの人が甲佐町に住むことで、町に雇用が生まれます。それによって、納税する人と額が増え、結果として地域が活性化するという好循環を生み出していくことを目指しています。

レストラン「トラットリア サンヴィート」

課題解決への流れ

まずは、域外から呼び込んだ人たちが甲佐町の魅力に触れ、町のファンになってもらうことを目指しました。そのために、町のさまざまな魅力はもちろん、パレットが行っている取り組みも積極的に発信。これにより関係人口や交流人口が増えただけでなく、その先の移住・定住希望者の増加にも繋がるという効果が生まれました。

一方で、町外に向けての発信や団体メンバーだけでの活動では、地域住民への周知や認知度が上がらず、新たな協力者・賛同者の獲得が見込めません。そこで、住民参加型のイベントやワークショップを実施。地域住民を巻き込みながら、そこに移住者も一緒に参加することで、両者が共にまちづくりに関わる仲間になってくれるという好循環を生み出せるように日々取り組んでいます。

町営キャンプ場の指定管理者を受託

具体的な取り組みや今後の活動予定

メンバー間では事業の理念の共有が図られていますが、アルバイトやパートなどのスタッフにまではまだ浸透していない点があります。そうした意識の共有を含め、中心事業の一つであるレストラン事業の体制強化や総務・経理専任スタッフの配置等、中長期的な事業継続のための環境整備を進める必要性を感じていました。

その一環として、2022 年からは、鮎料理を提供する甲佐町を代表する施設の「甲佐町やな場」の運営を引き継ぎました。また、2024 年からは、特に欧米を中心にインバウンド需要も増えてきました。欧米の旅行者は、長期滞在者も多いので、より地域の魅力を知ってもらえる仕掛けをしていきたいと考えています。さらに、熊本は台湾からの旅行者も急増していますが、まだまだ甲佐町は (台湾人の) 認知度が高くないので、今後はそこへ向けても積極的に情報発信を行ったり、交流を図ったりしていきたいと思います。

甲佐町では人口減少が進んでいますが、町では子育て支援や定住促進に向けての施策や環境整備に取り組んでいます。そうした取り組みを効果あるものにするためにも、町との連携や協力を深めながら、団体として地域の魅力発信にこれまで以上に努めていく必要がある時期だと感じています。

2022 年度より町から運営を受け継いだ「甲佐町やな場」

商店街の入り口に建つ築 130 年の「旧松永邸」を改修した宿泊施設も運営

一般社団法人パレット
代表　大滝祐輔さん

02 美里 COcCARU（こっかる）

＃観光振興
＃資源保全
＃交流人口創出

豊かな山里を“ 資源”にした ソーシャルビジネスを展開

■団体概要

組織名　美里 COcCARU（こっかる）
所在地　下益城郡美里町土喰 1-3
　　（美里町役場砥用庁舎内）
代　表　園田 薫
会員数　10 人
設立年月　2021 年 4 月

■主な活動内容

設立準備会を経て、2021 年 4 月に正式に活動開始。前身となる地元の山菜を活用した地域活性化プロジェクトを進化させ、「美里の豊かな山里を守り、活かし、未来につなぐ」をコンセプトに、団体の活動 PR の場も兼ねた取り組みとしてマルシェ開催を行っています。

地域および団体の課題

美里町では、全国の中山間地域共通の課題ともいえる高齢化や若者の流出、それに伴う人口減少という課題を抱えています。また、前身となる地域プロジェクトからの目標であった「山菜を活用した地域活性化」に取り組む中で、活動のフィールドとなる山林が想像以上に荒廃しているという現状を目の当たりにし、それをどのように食い止めるかという新たな課題もクローズアップされました。

そこで、これまで掲げてきた山菜による地域活性化にとどまらず、それによって見えてくる多様な地域課題を見据えた幅広い活動の必要性を感じました。そうした過程を経て設立したのが「美里 COcCARU(こっかる)」です。

山林の保全活動

課題解決への流れ

2021 年の団体設立に伴い、メンバー間で活動の方向性を議論する中で、「美里の豊かな山里を守り、活かし、未来につなぐ」というコンセプトを定めました。

これを基に、地域資源を活用して地域活性化、産業創出、交流人口増に繋がるソーシャルビジネスの模索を始めました。団体内で話し合った結果、美里町を楽しむコンテンツとして 3 つのメニュー「山菜ファーム (＝山菜を活用したアクティビティの企画･運営)」「体験型観光 (＝たき火を活用したアクティビティの企画･運営)」「山里トレッキング (＝トレッキングをテーマにしたアクティビティの企画・運営)」を決定。

今後は、これらを具体的な取り組みとして実施し、その都度ブラッシュアップしていきながら、交流人口の拡大を目指します。

山里トレッキング

具体的な取り組みや今後の活動予定

2023 年 12 月には、体験型コンテンツと組み合わせたクリスマスマルシェを開催しました。「小さな森のマルシェ」と題し、緑川ダム休憩所を利用して実施。ダム管理所、美里町、林業関係者などと協力し、地域の事業者はもちろん、町外からの出店もあり大変賑わいました。体験型コンテンツとしては、木の人形づくりや木製のゲーム体験、美里町発祥の杉シャカインを使ったクリスマスツリーの販売などを行いました。クリスマスマルシェは、引き続き 2024 年も開催。場所を町営のキャンプ場に移し、キャンプ場内のログハウスを活用した室内でできる体験型コンテンツを増やしました。

今後は、商品開発したものなどの PR の場として利用できるイベントを目指します。

さらに、コロナ禍の影響で一時中止していた体験型観光の活動を復活させ、山里トレッキングのコースづくりや体験型観光の商品開発などを通じた里山の保全に本格的に取り組みたいと思っているほか、米づくりや麦、大豆や小豆の作付け、しいたけ栽培など、地域農業の継承にも関わりたいと考えています。

マルシェでは自然を活かしたものづくり体験を実施

イベントには町内外からの出店もあり、交流につながった

美里 COcCARU
代表　園田 薫さん

03 一般社団法人のあそび labo

＃資金調達（自主事業）
＃駅前活性化

荒尾駅前の活性化を起爆剤に “のあそび”で地域を元気に！

■団体概要

組織名　一般社団法人のあそび labo
所在地　荒尾市万田 1560-1
代　表　中村光成
会員数　7 名
設立年月　2020 年 4 月

■主な活動内容

代表を務める中村光成さんの呼びかけで、「野遊び（アウトドア活動）を軸にした地域づくり」を目的に設立。荒尾駅前のビルをホテルやカフェ、コワーキングスペースを併設する複合施設としてリノベーションした「のあそび lodge」の運営をはじめ、アウトドアイベントの開催や荒尾駅前エリアを中心とした市街地エリアの活性化に取り組んでいます。

地域および団体の課題

住宅地の開発や商業施設の進出などが相次ぎ、荒尾市の賑わいがグリーンランド周辺の緑ヶ丘エリアに移ることに伴い、JR 荒尾駅前の商店街は衰退が続いており、空き店舗が増加しています。また、駅前にある広場や駐車場もあまり活用されておらず、一帯の空き店舗の利活用や賑わい創出が急務となっています。

加えて、荒尾市が近隣の玉名市や大牟田市に比べ、街としての知名度・認知度が低いことも、地域の活性化を考える上での課題の一つです。団体としては、駅前の元ビジネスホテルをリノベーションして運営を始めた団体の拠点兼宿泊施設である「のあそび lodge」の常駐スタッフの確保を含めた組織の強化や、今後の持続的な団体運営のために必要な資金調達を、どのような形で行うのかなどが課題となっていました。

DIY でリノベーションした駅前ビル

課題解決への流れ

まずは、安定的な活動資金を確保するために、団体メンバーや DIY に興味のある方々の協力を得てリノベーションした「のあそび lodge」内の宿泊施設等の運営を軌道に乗せることを目指しました。

しかし、団体内に宿泊施設のノウハウを持ったメンバーもおらず、当初は全く手探りの状態で準備を進めていました。そこで本事業を通じて県内のホテルスタッフや簡易宿泊所オーナーなどから、現場の生の声や運営に必要なノウハウを学び、これまでのやり方を一つ一つブラッシュアップしながら、少しずつ運営を安定させていきました。

また、県の補助金などを活用し、駅前広場等を活用したマルシェや防災イベントなど、駅前の賑わい創出につながる取り組みを実施して実績を重ねた結果、地域住民や荒尾市の各課から駅前活性化に関する相談が寄せられるようになり、これまで以上に活動の幅が広がりました。

総合プロデューサー 2 人を迎えての成果報告も実施

具体的な取り組みや今後の活動予定

①宿泊施設の運営安定化　②自主イベントの運営体制の見直し　③野遊び活動の普及・拡大を目標に具体的な活動を展開しました。

2022 年にオープンさせた宿泊施設「のあそび lodge」は、2 年目には黒字化に成功し、団体にとって貴重な収入源となっています。これがきっかけとなり、2023 年には荒尾市から駅周辺の別の空き店舗での DIY リノベーションを行う「荒尾駅前活性化プロジェクト」の話があり、委託事業として元たばこ店だった建物での DIY ワークショップなどを実施し、2024 年 5 月からシェアキッチンとして運営しています。

さらに、無人駅化の危機に瀕している JR 荒尾駅舎の利活用に関する実証事業にも参加。駅舎内の遊休スペースを、待合室、ワークスペース、地域の特産品販売所、カフェなどとして活用するという取り組みで、「のあそび labo」は、「あらおリビング」と名付けられたコミュニティスペースの運営を担っています。

また、駅前広場を活用した「のあそびマルシェ」もすでに 8 回の開催を重ね、駅周辺の賑わい創出にひと役買っています。こうしたさまざまな取り組みが認められ、2023 年には熊本県の「地域づくり夢チャレンジ大賞」を受賞するなど、少しずつ活動の意義が認知されてきています。今後は、荒尾競馬場跡地に整備が進む「あらお海陽スマートタウン」と駅前エリアの連携なども含め、日常や街なかに、もっと“のあそび”があふれる荒尾市の実現を目指したいと考えています。

JR 荒尾駅前の空き店舗をリノベーションしたシェアキッチン

「あらおリビング」内のカフェスペース

一般社団法人のあそび labo
代表　中村光成さん

04 走潟（はしりがた）マルメロ会

＃資金調達 (自主事業)
＃団体の活力向上

マルメロ栽培を復活させ、まちづくりの核として活用

■団体概要

組織名　走潟マルメロ会
所在地　宇土市走潟町 822(走潟公民館)
代　表　村田一信
会員数　26 名
設立年月　2014 年 1 月

■主な活動内容

江戸時代から宇土市走潟地区で栽培されていた果実「マルメロ」を原料に作られていた熊本(肥後)藩の幕府献上菓子「かせいた」。戦後途絶えていたマルメロ栽培の復活と「かせいた」の復刻、新商品の開発・販売などに取り組む一方、地域住民向けの花見会、収穫祭の開催や地元小学校でのマルメロジャム作り指導などを通して、地域全体の巻き込みも図っています。

地域および団体の課題

宇土市走潟町は、施設園芸農業が盛んな地域です。しかし、他の地域同様、少子高齢化が急速に進行しており、それに伴って徐々に町の活気も失われつつあります。そうした状況の中、走潟マルメロ会では、地域の活性化の一翼を担えればとの思いから、かつて地域の特産であったマルメロや、それを使った菓子「かせいた」の復刻に取り組みました。

果実の栽培や菓子製作まで何とかこぎつけたものの、それを団体として具体的にどのように地域の活性化に活かしていくかという目標が、メンバーの中で十分に共有できていませんでした。

また、「かせいた」やジャムなど、これまでに作ったマルメロ製品を販売して収益化し、持続的な団体運営を実現するための原資にする必要がありますが、その方策 (具体的な販売方法や販売先) については、定まっていませんでした。

復刻された「かせいた」

課題解決への流れ

マルメロ会を中心に取り組んできた栽培や「かせいた」の試作ですが、どうしても団体メンバー以外では地域の中での認知度も高くなく、どうすれば今まで以上に協力者を集め、地域の子どもたちや住民を巻き込みながら活動の幅を広げていけるかを、団体内で議論しました。

そうした話し合いを経た後、具体的な動きとして、地元小学校でのマルメロジャム作りイベントや地域の老人会への訪問などを実施しました。加えて、製品としての「かせいた」のブラッシュアップを図るため、原料保存や製造における品質管理について研究しました。

さらに、今後 PR イベントなどを行う際のノウハウ獲得のため、熊本市中心市街地で「かせいた」の試食・即売イベントを実施しました。イベントを通じて、直接消費者の声を聞けたことで製品販売に手ごたえを感じ、メンバーのモチベーションアップにもつながりました。

再び栽培されるようになったマルメロ

具体的な取り組みや今後の活動予定

「かせいた」の品質・生産量向上と新製品開発に取り組み、製品販売を通して地域（原料生産者、加工者など）にも還元できるよう模索します。加えて、地元小学校でのイベントやマルメロの花見会など、地域内での活動にも継続的に取り組み、地域の巻き込み、地域全体の活性化につなげることができればと考えています。

また、2023 年 1 月と 2 月の 2 度にわたって、東京・上野で「かせいた」の販売会を実施。首都圏でのマルメロや「かせいた」の認知度向上に努めました。さらに、「かせいた」は宇土市のふるさと納税の返礼品としても出品されており、こちらも全国に向けた販路拡大の一つとして重要なツールとなっています。

こうしたこれまでのさまざま活動が評価され、2024 年、共同通信社が主催し、全国のまちおこしや地域課題解決に取り組む団体を表彰する「第 14 回地域再生大賞」で優秀賞を受賞。団体メンバーにとって、活動継続やさらなる活性化に向けたモチベーションアップにつながりました。

今後も、ふるさと納税返礼品としての販売を拡大するなど、さらなる地域振興と持続可能な事業モデルの確立を目指していきます。

地元小学校で行っているマルメロジャム作りの様子

東京で開催した「かせいた」の販売会

走潟マルメロ会
会長　村田一信さん

05 一般社団法人らぞ LABO

＃地域資源 (観光資源) を利用した活性化
＃情報発信
＃資金調達 (補助金)
＃域内での関係強化

地域の若手商工業者が立ち上がり 人吉球磨の魅力を発信

■団体概要

組織名　一般社団法人らぞ LABO
所在地　人吉市中青井町 306-6
代　表　北貴之
会員数　8 名
設立年月　2020 年 10 月

■主な活動内容

人吉球磨地方に甚大な被害をもたらした「令和 2 年 7 月豪雨」からの復興を目的に設立。お笑い芸人・ラランドとコラボした YouTube チャンネルを通じた人吉球磨のプロモーションに加え、球磨川を活用したアクティビティの造成、企業や学生を対象にした SDGs 研修会・勉強会の実施など、持続可能な「観光地域づくり」の実現を目指しています。

地域および団体の課題

人吉球磨地域をはじめとする県南地域に甚大な被害をもたらした「令和 2 年 7 月豪雨」。人吉市でも、道路や鉄道などのインフラが寸断され、長く不便な生活を強いられたほか、ホテル等の観光施設は浸水などの影響で長期間の休業を余儀なくされるなど、地域の商工業、特に人吉球磨地域を支えている観光産業は危機的な状況に陥りました。

そうした中、多くの人に人吉球磨の魅力を知ってもらい、復興への道を一歩ずつ歩んでいる地域を訪れてもらうために何ができるかを考え、人吉球磨地域で観光業や飲食業を営む若手有志で設立したのが、「らぞ LABO」です。

一方で、団体としては、まだまだ経験やノウハウが不足しており、特にプロモーションやイベント運営の手法、継続的な活動を行っていくための資金の確保が、大きな課題となっていました。

人気お笑い芸人とコラボした情報発信

課題解決への流れ

団体としての活動の具体化を模索する中で、まずは国の補助事業を活用することに決め、動画配信や PR イベントを実施する事業が採択されました。

動画配信では、テレビ等でも活躍している人気お笑い芸人とコラボした動画を作成し、これまで人吉球磨地域を訪れたことがなかったり、知らなかったという新たな層への PR につながったとの手ごたえを感じました。さらに、将来的な収益化を目指し、コンテンツのブラッシュアップや収益化の手法の研究などにも取り組みました。

また、人吉球磨地域のさまざまな魅力を PR するためのプロモーションイベントを、JR 博多駅で実施しました。地域の魅力を九州屈指の人出がある場所で発信できたことはもちろん、多数の地元事業者にブース出展してもらうことで、地域の巻き込み (賛同者や協力者づくり) にもつながりました。

JR 博多駅での人吉球磨観光プロモーションイベント

具体的な取り組みや今後の活動予定

補助金に頼らず自走していくためには、活動の収益化が重要と感じており、そのための一つの方法として YouTube を活用した収益化を目指しています。また、JR 博多駅での人吉球磨観光プロモーションイベント観光情報発信の支援を行うなど、地域との連携も深まりました。

さらに、熊本県旅行業協同組合が主導し、「らぞ LABO」が監修を担当したカーボンオフセットを活用した人吉市のエコツーリズムが、観光庁の「サスティナブルな旅アワード 2024」で奨励賞を受賞。人吉が持つ自然・歴史・文化・暮らしを大切にしながら、時代のニーズを捉えた「アドベンチャートラベル」を提唱し、さまざまなコンテンツを展開しています。他にも、「人吉 MaaS gyanit」のプロモーションを担当。パートナーシップ協定を結ぶ人気お笑いコンビ「ラランド」を起用したプロモーション動画を制作し、今後幅広いプロモーションを展開予定です。2025 年 1 月には、今回で 3 回目となる東京での球磨焼酎 PR イベントを開催。日頃焼酎を飲まない 20 ～ 30 代の若い世代に球磨焼酎を PR しました。

加えて、YouTube チャンネルの収益化に向けてリニューアルを実施し、新たな人吉球磨地域のファン獲得を目指しています。

らぞ LABO が監修したエコツーリズムの様子

東京で開催した球磨焼酎 PR イベントの様子

一般社団法人らぞ LABO
代表　北貴之さん

06 NPO 法人網田倶楽部（おうだくらぶ）

#駅前活性化
#資金調達 (自主事業)
#資金調達 (委託業務)
#団体の活力向上

レトロな“驛舎”を中心とした活性化に加え、新たな課題解決にも挑戦

■団体概要

組織名　NPO 法人網田倶楽部
所在地　宇土市下網田町 2097-2
代　表　益田信明
会員数　25 名
設立年月　2004 年 8 月

■主な活動内容

過疎化が進む地域の現状に危機感を抱いた当時 30 ～ 40 代の住民が中心となって、「行政に何を求めるかではなく、まず自分たちで何ができるか」を理念に発足した団体。「網田駅を核としたまちづくり活動」をテーマに、網田駅舎の指定管理事業、駅舎内のカフェ「網田レトロ館」の運営、駅を利用する小学生の見守りなどに取り組んでいます。

地域および団体の課題

宇土市網田地区は少子高齢化に伴う過疎化が市内の他の地域に比べても顕著な地域で、現在の人口は、最も多かった 1950 年代の約 8,000 人の半分以下になっています。そうした人口減少に伴う課題として、近年は“買い物難民”の増加、医師不足、空き家の増加など、住民生活における弊害が具体的な形となって現れており、地域の活力不足に拍車がかかっています。

また、地域が抱える課題は、団体の活動にも影響を及ぼしています。特に、メンバーの固定化・高齢化によって、これまで取り組んできたさまざまな活動に新鮮味が失われつつあるという現状があります。

今後、団体の活動を持続していく上でも、新たな取り組みの模索や次世代のまちづくりの担い手育成が急務となっていました。

「網田レトロ館」が提供するパンケーキ

課題解決への流れ

さまざまな地域課題と団体としての課題を検討していたところ、網田地区をロケ地とした映画の撮影が決まったことを受け、これを地域活性化の起爆剤にしたいと考え、網田倶楽部では地域の魅力再発見の一環として、団体が委託を受けて運営に当たっている JR 網田駅内のカフェメニューのブラッシュアップなどに取り組みました。

また、多様化する地域課題にどう向き合うべきかについて、メンバー以外にも広く意見を求めるために、地域住民に呼び掛けて話し合いの場を設けました。これまで団体の活動に関わりのなかった若い世代も参加して行われた議論では、さまざまな意見が出されました。その中で、地域の人口減少対策の一つである移住者の増加を図るために必要な「移住者受け入れのための住環境整備」に取り組むべきだという意見が多かったことを踏まえ、地域内の空き家の視察、持ち主や移住希望者のニーズ調査などを実施し、今後団体としてどのような取り組みが可能かを模索しています。

地域内の空き家の視察

具体的な取り組みや今後の活動予定

移住・定住促進とそのための住環境整備という新たなテーマが見つかり、またその活動を担う若手グループも出てきました。今後は網田倶楽部の活動に加え、地域の次代を担う若手の支援・サポートという役割も果たし、広く地域づくりに貢献したいと思います。

また、網田倶楽部としても、駅舎という“拠点”がある強みをより生かすために、これまで行ってきたさまざまな取り組みのブラッシュアップや、新たな挑戦を行っています。

JR 九州が三角線で運行している観光列車「A列車でいこう」停車時のおもてなしとして、地元特産のネーブルやデコポン (不知火) を使ったスムージーを開発して乗客に販売しているほか、地元有志で結成しているバンド「網田オールスターズ」が、演奏を披露して歓迎ムードを盛り上げています。

また、駅舎内のカフェ「網田レトロ館」では、九州パンケーキのワッフル種を活用した「駅とワッフル」をメニューに加えたほか、熊本県の「地域づくり夢チャレンジ補助金」を活用して、ネーブルのチャツネとジビエを使ったレトルトカレー「驛舎カレー」の開発を進めています。

現在、網田駅は駅舎の改修中ですが、2025 年 4 月には完成するので、カフェもそれに合わせてリニューアルオープンを予定しています。「驛舎カレー」も、カフェでの販売を考えています。

試作中の「驛舎カレー」

観光列車のおもてなしバンド演奏の様子

NPO 法人網田倶楽部
会長　益田信明さん

07 菊鹿さきもり隊

＃中山間地域活性化
＃新事業への取り組み
＃目標設定
＃合意形成

祭りの企画・運営主体の活動から
地域課題に取り組む団体に

■団体概要

組織名　菊鹿さきもり隊
所在地　山鹿市菊鹿町下内田 713
代　表　田河正行
会員数　61 名
設立年月　1995 年 4 月

■主な活動内容

地域おこしの一環として各地区より選出された“隊員”と、商工会青年部や市役所若手職員などで構成。1996 年から地元・菊鹿町の子どもフェスティバルや夏まつり（現きくかまつり）の企画・運営を行っています。2019 年からは、日本の棚田百選にも選ばれている「番所の棚田」の保全を中心に、農村 RMO 形成に向けた取り組みを行っています。

地域および団体の課題

山鹿市菊鹿町 (旧菊鹿町) は、高齢化や人口減少に伴い、農業をはじめとする地域産業の衰退が深刻で、担い手不足、耕作放棄地の増加という課題を抱えています。

そうした中で、この地域の誇りであり、貴重な財産でもある「番所の棚田」と、そこで古くから行われてきた伝統的な米作りを、どのように次世代へ伝えていくかについても、地域が抱える大きな問題であり、団体として取り組むべき課題の一つです。

棚田の保全や担い手の確保は、高齢化や人口減少が進む中で、現在この地域に住んでいる人の手だけで行うことは難しく、それを補うためには移住定住者を増やすこと、さらに、そのきっかけとなる交流人口の拡大を目指す必要があります。

しかし、これまではどういった形でそうした課題の解決に取り組むべきかが、団体内でしっかりと議論されておらず、メンバー間の目線あわせもまちまちで、団体の在り方を含めて模索する状況が続いていました。

地域の強み・課題、団体の目標、手法の洗い出し

課題解決への流れ

団体としての新たな方向性や、それを具体的に実践するための活動について議論する中で、「地域の財産（強み）」「地域の課題」「さきもり隊として実現したい目標」「その手法」を、まず洗い出しました。

それを踏まえ、「(団体として実現したい) 目標」と「手法」をかけ合わせる形で、①棚田の保全　②地域の魅力を伝えるアクティビティの開発、運営　③地域住民の巻き込み　という 3 つの活動方針をまとめました。

この方針を基に、それぞれの実現に向けて短期・中長期に取り組むべきことを具体的に落とし込んでいきました。加えて、棚田所有者向けのアンケートを行って、所有者の意識集約 (今後、棚田をどうしたいか／どうなってほしいか等) を図ったほか、より多くの地域外の方々の「番所の棚田」に興味・関心を持ってもらうために、棚田を楽しむ山歩きルートの作成を行いました。

番所の棚田に近い廃校をイベントの拠点として活用できるか検討

具体的な取り組みや今後の活動予定

新たに取り組む「棚田の保全」「地域の魅力を伝えるアクティビティの開発・運営」を行っていく上では、法人化も含めた組織の再編成が必要です。新たな活動を通して、持続的な活動のための収益創出と、地域の活性化に取り組みたいと考えています。

組織の再編成に向けた具体的な取り組みとして、農村 RMO(農村型地域運営組織) 形成を進めています。農村 RMO は、地域の暮らしを守るために、地域で暮らす人々が中心となって形成し、地域コミュニティの維持や地域課題の解決に向けた取り組みを持続的に実践する地域運営組織 (RMO) の一つです。

現在は、その形成に向けて、団体メンバーだけでなく地域住民や域外の賛同者・協力者など、多様な人材や組織と連携を図りながら、「農用地保全」「地域資源活用」「生活支援」の 3 分野にわたる取り組みを展開しています。今後は、農村 RMO の形成を軌道に乗せることで、持続可能な集落を目指していきたいと考えています。

メンバー以外にも広く意見を聞くために開いた住民ヒアリング

農用地保全の取り組みの一つ、棚田の石垣復旧

菊鹿さきもり隊
隊長　田河正行さん

08 熊本地震・平田震災遺構保存会

＃地域資源 (震災遺構) を利用した活性化
＃既存事業のブラッシュアップ
＃新事業への取り組み
＃資金調達 (自主事業)

地域に残る熊本地震の震災遺構を保存・発信して次世代へ継承

■団体概要

組織名　熊本地震・平田震災遺構保存会
所在地　上益城郡益城町平田 1318
代　表　濱田雅之
会員数　11 名
設立年月　2022 年 7 月

■主な活動内容

地域に残る熊本地震の遺構を当時のまま見学できるよう、周辺の草刈りや見学路の清掃などの保存活動に取り組んでいます。また、見学に訪れる研究者や大学生、一般市民、小学生などに対して、それぞれに合わせた説明や資料を用意したり、現地のガイド活動も行っています。さらに、教育機関とも連携し、地域の小学校の生徒たちに震災の記憶を継承していきたいと考えています。

地域および団体の課題

2016 年に発生した熊本地震。震度 7 の揺れが 2 度にわたって起こった益城町では、災害関連死を含め甚大な人的被害と家屋・インフラ等への被害を受けました。しかし、年を追うごとに復旧・復興が進み、震災のつめ痕が新しい建物や道路へと変わっていくに従い、震災の記憶が徐々に薄れてきています。

こうした中、震災の教訓をどのように残し、後世に伝えていくかは、被災地として重要な課題です。これまで実施してきた震災遺構のガイドは学術的な内容を中心としたものだったため、団体としては今後、より幅広い層に関心を持ってもらえるような内容やガイド方法を、どのように構築していくかが課題でした。

また、地域に残る震災遺構の保全のための資金が不足しているのに加え、これまでのように公的な補助金だけに頼っていては持続的な運営が難しくなるため、今後の団体活動を支える資金創出も急務でした。

現在も残る震災の痕跡

課題解決への流れ

まず手始めに、団体の拠点である益城町平田地区の地域住民に関心を持ってもらうため、地元の教育機関に働きかけ、小学校の見学授業の一環として震災遺構を訪れてもらい、保存会メンバーがガイドを実施しました。

これまでのガイドの際には、学術的な表現や専門用語などを多用していました。しかし、小学生などを対象にした教育見学として受け入れるに当たっては、そうした部分を見直し、新たに子ども向けのガイド手法について検討しました。

また、地域内外の人に広く平田地区の震災遺構を知ってもらい、足を運んでもらうためのアプローチとして、震災遺構と地域の魅力発信を組み合わせたフットパスイベントを企画・運営しました。イベント開催は、参加料による資金創出にもつながり、持続的な活動を支える上で重要となるため、今後も少しずつブラッシュアップしながら、震災の記憶を後世に伝えていきたいと思います。

断層により損傷した桜の木をガイド

具体的な取り組みや今後の活動予定

情報発信の一環として取り組んだホームページの効果で、県外の地域づくり団体などからの見学申し込みが増えています。見学の受け入れに際しては、事前にメール等で見学目的をヒアリングし、その目的に沿った案内を行うよう努めています。

また、日常的に地域の方々とのつながりを作っておくために、保存会が中心となって教育集会所で「運動教室」を開催。地域住民の集いの場を設け、コミュニケーションを図れるようにしています。さらに、毎年 3 月下旬には「平田・滝桜まつり」を開催し、地域の人々が世代を超えて集えるようにし、イベント内で震災遺構の案内も実施しています。地震から 9 年が経過し、当時の記憶が風化していく中、このまつりは記憶の継承の意味でも重要なイベントですが、今後、団体メンバーの高齢化が進む中で、存続に向けた対策の必要性も感じています。

その一方で、保存会の取り組みが認められ、2024 年 11 月に日本活断層学会の学会賞を受賞しました。受賞によって、保存会の内外で活動の意義が再認識されたことで、今後、行政からの活動資金の補助・援助や、活動に参加してくれるボランティアが増えてくれればと期待しています。

地元小学生に布田川断層帯のはぎ取り標本の説明

見学コースの通路作り作業

熊本地震・平田震災遺構保存会
会長　濱田雅之さん

09 坂より上自治会

＃中山間地域活性化
＃移住定住の促進
＃資金調達 (自主事業)
＃団体の活力向上

地区を応援してくれる仲間やファンを増やして住民の活力向上に

■団体概要

組織名　坂より上自治会
所在地　八代市東陽町河俣坂より上地内
代　表　区長／中島和生
会員数　正会員 23 名、賛助会員 21 名
設立年月　―

■主な活動内容

坂より上地区は、八代市の東部に位置しています。自治会では、2024 年 10 月にキャンプ場をオープンし、ヤマメ販売や清流川のぼりなど、恵まれた自然を生かしたアクティビティも体験できる施設として収益化を実現しています。さらに、賛助会員制度による地域応援団の編成、年 6 回開催する地域イベントを活用した交流人口の増加に取り組んでいます。

地域および団体の課題

坂より上地区は、昭和初期までは林業を中心として栄えてきました。しかし、海外からの安い輸入材に押されて国産木材の需要減少や価格下落が発生。林業の衰退にともなって集落の人口も減少の一途をたどりました。その結果、地域の過疎化・高齢化が進み、現在では「限界集落」となっています。

そうした状況の中、さまざまな地区活動を行う上での拠点である公民館をはじめ、地域の共有施設の維持管理が非常に難しい状況になっており、そのあり方や活用法が喫緊の課題となっていました。

公民館などを持続的に運営していくために必要な人手はもちろん、そのための資金も不足しており、それらをどうやって確保するか、具体策を早急に考える必要があると感じていました。

地域行事ではヤマメの塩焼きなどを販売して活動資金に

課題解決への流れ

現在の自治会は、「正会員」「賛助会員」からなっていますが、そこに新たに「サポーター」を加え、地域内外を問わず、坂より上地区との関わりを持ってもらえる人を幅広く受け入れる仕組みづくりを検討しました。

そのためには、地域の魅力を発信し、坂より上地区を知ってもらう必要があると考え、各住民がスマートフォンで撮影した四季折々の地域の風景やイベント開催時の様子などをクラウドサービス「Google フォト」で共有し、会員組織へ情報発信する素材として蓄積していく仕組みもスタートさせました。

また、これまで地域住民で行っていた「どんどや」などの地域行事を域外からも参加できるイベントに作り替えるなど、持続可能な手法も模索しています。こうした取り組みを進める中で、住民や賛助会員のモチベーションが次第に高まり、積極的に自治会活動や地域のイベントに参加する中心メンバーが育ちました。

公民館内の囲炉裏を囲んで村岡氏（写真右端）と共に

具体的な取り組みや今後の活動予定

イベント開催などで盛り上がった集落の“元気力”の維持と地域一帯の環境の有効利用、さらにそれをどう次世代に引き継いでいくかが今後の課題です。そのために、お試し移住の受け入れや耕作放棄地の再活用などの環境整備、イベントの周知広報、賛助会員・サポーターの確保などを通じて、坂より上地区を本当に応援してくれる仲間を増やしていきたいと考えていました。

そうした取り組みの一環として、2024 年 10 月にオープンしたのが「坂より上キャンプ場」です。トイレやシャワールームなどを完備した別棟を増設するなどして、利用者の利便性を図っています。さらに、地域内の耕作放棄地の借り上げを実現。すでに収穫体験イベント用の作物栽培にも着手しています。

他にも、八代市の伝統無形文化財に指定されている郷土芸能「坂より上棒踊り」を地元の東陽小・中学校に伝承する取り組みを行っていることに加え、2025 年 9 月には坂より上分校の全世代同窓会も開催予定です。

今後は、地区を訪れるツーリング客を対象にした五木村とのコラボ事業を模索しているほか、季節ごとに期間限定で“公民館カフェ”をオープンさせたいと考えています。

完成したキャンプ場のトイレ＆シャワールーム

大自然に囲まれた中でキャンプが楽しめる

坂より上自治会
橋永高徳さん

10 一般社団法人 川尻まちづくり

＃地域活性化
＃産業創出
＃資金調達 (クラウドファンディング)
＃既存事業のブラッシュアップ

地元出身格闘家の顕彰や拠点の再構築で地域にさらなる賑わいを

■団体概要

組織名　一般社団法人 川尻まちづくり
所在地　熊本市南区川尻 1-3-77
代表　　栗崎 剛
会員数　5 名
設立年月　2017 年 12 月

■主な活動内容

川尻商店街連合会の主要メンバーによって設立され、地域と商店街の活性化を目的に活動しています。現在は、地域のアンテナショップ「川尻商店 粋（すい）」や、地域通貨「川尻ワッショイポイント」の運営を行うほか、観光動線と観光資源の開発に力を入れています。また、国指定史跡「川尻米蔵跡」へ続く「川尻蔵前通り」を冠した新商品の開発やブランド化、川尻の新たな魅力づくりについても検討を始めています。

地域および団体の課題

今から約 400 年前の加藤清正の時代から船着場の宿場町として栄えた熊本市南区の川尻地区。地域の中には今なお、白壁の古い蔵が立ち並び、当時の繁栄の面影をいたるところに見ることができます。また、“職人の町”としての顔も持ち、今も刃物や菓子の職人たちが店を構えています。

一方で、宅地やマンションが少なく、以前に比べると人口も減少し、それに伴って商店も少なくなっています。そこで、現在住んでいる住民やその子どもたちの世代が、「これからも川尻に住み続けたい」と思ってもらえるような魅力あふれるまちづくりを進めたいとの思いで、「川尻まちづくり」を設立しました。

歴史ある街並みをはじめ、これまで地域の中で受け継がれてきたさまざまな伝統文化を未来に伝えていくことはもちろん、地域の偉人を顕彰する取り組みなども行っていくことで、より多くの人に「川尻」を知り、訪れてもらうきっかけにしたいと考えています。

団体の拠点でもある「川尻商店 粋」

課題解決への流れ

「川尻まちづくり」では、これまでも町屋の利活用や歴史ある町並みを活かしたインバウンドの対応など、多岐にわたる活動を行ってきました。また、2023 年からは、専門家のアドバイスも受けながら、川尻出身の伝説の格闘家・木村政彦さんを顕彰するための記念館設立を目指すクラウドファンディング造成にも取り組みました。

また、地域の特産品などを販売する売店とカフェを併設し、地域のアンテナショップの役割を担っている「川尻商店 粋」のブラッシュアップも進めています。特に、イートインスペースに関しては、利用者の視点に立った店内レイアウトの変更や、川尻ゆかりのものを使った新たなメニューの提供などを、地元の飲食店などの協力も得ながら進めました。

加えて、「川尻商店 粋」を曜日限定で夜営業を始め、地域内外の人同士が集い語り合う場を設けたほか、同施設 2 階にある簡易宿泊施設「川尻 泊 (とまり)」の活性化にも努めています。

「木村政彦記念館」設立に向けてクラウドファンディングを呼び掛け

具体的な取り組みや今後の活動予定

クラウドファンディングを活用して開館を目指していた「木村政彦記念館」が 2024 年 9 月に無事オープンを迎え、現在は週末の 10 ～ 17 時のみ営業していますが、県外からも多くの来館者が訪れています。

一方で、物販とカフェはスタッフの退職などに伴い、営業を終了しました。現在は、コミュニティレンタルスペースとして活用を進め、平日は習字教室として、土曜の夜は支援でのアイデアをもとにスタートした、個性豊かな川尻の人たちが週替わりで“マスター”や“ママ”としてカウンターに立つ「スナック酔」がオープンし、賑わっています。

また 2 階の簡易宿泊施設は、2024 年 9 月より熊本学園大学の畠山ゼミの学生が約 4 カ月にわたって「宿泊客増加と施設の活性化を通じたまちづくり」をテーマにマーケティング分析を行い、その結果をもとにした企画の提案を受けたほか、自身でゲストハウスなども運営する空間ディレクターに宿泊スペースのプロデュースを依頼するなど、ブラッシュアップに取り組んでいます。2025 年 4 月には、宿泊受付アプリの運用も開始予定です。

川尻地区では、2023 年に国指定史跡「川尻米蔵」が修復され、2024 年には木村政彦記念館がオープンするなど、観光スポットが増えてはいるものの、まだ「点」に過ぎません。今後、これを線として繋いでいく上でも宿泊施設の充実は重要だと考えており、「泊」の魅力・価値向上を通じて団体の持続的な活動のための資金調達を行い、魅力的なまちづくりにつなげていきたいと考えています。

「木村政彦記念館」の館内の様子

熊本学園大学の学生たちによる企画提案

一般社団法人
川尻まちづくり
代表　栗崎 剛さん

11 株式会社しいやま／はらぶの縁側 SACHIKO の部屋

＃地域活性化
＃拠点施設の利活用
＃域内での関係深化
＃情報発信

イベント等を通じて認知をアップさせ 拠点施設を地域の“よりどころ”に

■団体概要

組織名　はらぶの縁側 SACHIKO の部屋
所在地　山鹿市鹿本町来民 1243-1
代表　　原山幸子
会員数　30 名
設立年月　2024 年 6 月

■主な活動内容

山鹿市で介護予防拠点通所事業を行っている法人「株式会社しいやま」は、山鹿市の委託を受け、市主催の介護予防教室を実施しています。こうした活動を通じて地域住民が交流できる拠点づくりの重要性を感じ、同市鹿本町の来民商店街にある空き店舗を購入。2024 年 6 月から、「はらぶの縁側 SACHIKO の部屋」として、地域の高齢者や子どもが気軽に立ち寄り、世代間交流を図ることができる場づくりに取り組んでいます。

地域および団体の課題

山鹿市鹿本町の来民商店街は、地域の人口減少が進んでいることや、経営者の高齢化などに伴い、現在はほとんどが空き店舗のいわゆる“シャッター商店街”で、日中でも閑散とした状況です。弊社が運営している介護事業所の送迎で何度も商店街を通るたびに、「この商店街を、何とか昔のように“人が集える場”に出来ないか」という思いを抱いていました。

また、地域には一人暮らしの高齢者も多く、シャッターの開いている店舗があることで気軽に足を運べる「行き場」となり、集まった人同士が交流を図れる機会が作れるのではないかと考え、空き店舗の購入・利活用を行うことにしました。

加えて、商店街を通る道路は、地元の鹿本中学校の通学路にもなっており、空き店舗を高齢者の集いの場としてだけでなく、地域に暮らすさまざまな世代の交流スペースとして活用し、地域活性化に役立てばと考えています。

シャッターの下りた店が目立つ商店街

課題解決への流れ

来民商店街内にある、元呉服店だった店舗を今後の活動拠点として活用するために購入しました。その後は、地域の夏祭りで子ども向けイベントを開催したり、フィンランド発祥のスポーツ「モルック」の体験会を実施するなど、今後の本格的な稼働に向け、どのような利活用が地域にとって有益かを模索していました。

荒尾市で、同様に空き店舗を団体の拠点としてリノベーションし、駅前の活性化に貢献している「のあそび labo」の視察などを経て、拠点があることの強みを改めて認識しました。また、地域住民に活動拠点を認知してもらう重要性も痛感。そのために、チラシの作成や、これまで下ろした状態にしていた拠点のシャッターを開けるなどして、より多くの人に存在を知ってもらうことに努めました。

また、認知度向上のためには拠点の名称やロゴを作ることも不可欠と考え、「はらぶの縁側 SACHIKO の部屋」という名前を付け、作成したロゴを通りに面したガラスに貼るなど、賛同者を増やすための公式 LINE 作成や財源確保に向けた利用料金の設定なども行いました。

拠点の活用法について話し合いを重ねる

具体的な取り組みや今後の活動予定

認知度を上げるためのさまざまな取り組みを通じて、運営している側もビジョンの明確化と共有が図れ、モチベーションアップにもつながりました。今後は、自主イベント「集いの場まちカフェ」等の継続的な開催を図りながら、地域住民が「はらぶの縁側 SACHIKO の部屋」を利用できる回数をさらに増やして行きたいと考えています。

そのために現在は、基本的に毎日朝 7 時から夕方 5 時までシャッターを開けており、通りに面したショウウィンドウには、近所の方が描いた油絵を展示しています。また、「誰でもカフェ」と「歌声カフェ」を合わせて月 3 回、地域主催の百歳体操を月 5 回、モルックを月 1 回開催。

こうしたイベントは、毎回、「みんなで支え合おうかもと」や「やまがサポーター」の皆さんの協力を得て行っています。他にも、地域の小学生を対象にした学習会、子ども向けのお話会などでも活用してもらっています。

今後もさまざまな催しやサロン開催を少しでも増やして、地域の「集いの場」としての役割を果たしていきたいと思います。特に、子どもから高齢者まで、世代を超えて参加できるイベントを年数回開催できればと考えています。加えて、独居の高齢者が多い地域特性を踏まえ、そうした皆さんが集える食事会を月 1 回でも開ければと模索中です。

拠点の PR のために作成したチラシ

「はらぶの縁側 SACHIKO の部屋」お披露目会の様子

はらぶの縁側 SACHIKO の部屋
代表　原山幸子さん

12 一般社団法人　看護のココロ

#賛同者づくり
#資金調達 (自主事業)
#目標設定
#他団体との連携
#情報発信

賛同者を増やすために視野を広げ “地域の保健室”の認知度アップを！

■団体概要

組織名　一般社団法人　看護のココロ
所在地　八代市築添町 1605-1
代　表　蓑田由貴
会員数　5 名
設立年月　2020 年 8 月

■主な活動内容

「令和 2 年 7 月豪雨」をきっかけに、2020 年に任意団体として活動をスタート。22 年に現法人に移行しました。看護師等、医療福祉介護分野の専門職に就くメンバーを中心に構成され、“医療の手前”の段階で高齢者の心と体の支援を行う地域の保健室「やっちろ保健室」を月 1 回の割合で開催。八代市の本町 1 丁目商店街の貸しスペースを活用し、血圧測定や酸素飽和度チェックなどの健康チェックのほか、料理教室なども実施しています。

地域および団体の課題

「看護のココロ」が主な活動拠点としている八代市や同市坂本町は、人口減少や高齢化が進む中、令和 2 年 7 月豪雨を契機に地域のつながりなども希薄になり、高齢者の体調の変化などが見過ごされやすい状況になっていました。

「看護のココロ」では、定期的な健康チェックなどを通じて地域で暮らす高齢者の心や体の健康をサポートするコミュニティナースの取り組みを参考して活動を展開。自分たちの役割を「地域の保健室」と定義し、当事者目線で利用者の話に耳を傾ける姿勢や、話がしやすい場づくりを心掛けてきました。

一方で、活動を継続していく上で直面したのが、「行政との連携強化を含めた賛同者の開拓」と「安定的な財源の確保」です。そうした課題をクリアするためには、自分たちの取り組みを、単に医療や福祉という分野で捉えるのではなく、“地域づくり”の一環という視点で捉える多角的なアプローチも必要だと感じています。

「やっちろ保健室」での健康チェックの様子

課題解決への流れ

課題の克服に向けた取り組みとして、まず他の地域づくり団体とのオンラインミーティングを通じて、持続的な活動を行うのに必要な資金の調達方法について具体的なアドバイスをもらいました。さらに、コミュニティナースを事業として展開している県外企業との話し合いの場を設け、事業化のために必要な考え方や具体的なやり方も学びました。

こうした外部からのアドバイスを参考に、まずは行政との連携にこだわり過ぎず、地道に活動を継続することで、自分たちの思いや取り組みを一人でも多くの方に知ってもらうことが重要だと感じました。さらに、それと並行して、活動の理解者・賛同者を増やすために、自分たち自身が活動を「言語化」することが重要だと改めて認識しました。

その上で、団体の存在や取り組みを知ってもらうための“場”づくり (イベントの開催や参加等) や、他の地域づくり団体などとの連携を図っていきたいと考えています。

事務局や担当プロデューサーが団体の課題を聞き取り

具体的な取り組みや今後の活動予定

九州パンケーキを運営している (株) 一平ホールディングスの村岡浩司社長の協力を仰ぎ、団体の認知度アップのために、八代市の 2 つの拠点（本町 1 丁目、坂本町鶴喰地区）でパンケーキを振る舞うイベントを企画しました。

普段開催している“保健室”には参加していない地域住民も多数訪れ、パンケーキという食を介して、団体の活動を知ってもらうきっかけづくりになりました。また、高齢者以外のさまざまな世代の認知にもつながり、今後もこうした場を設けていければと考えています。

また、八代市の情報誌「やつしろぷれす」に「看護のココロ」の活動内容が掲載され、地域の方々に広く周知することができただけでなく、実際に「記事を見た」という利用者や、活動に協力してくれるスタッフが増えています。さらに、山鹿市で活動している株式会社しいやまとの連携を図り、それぞれの地域の特性や実情について情報共有を行い、地域のニーズに応じた活動方法について検討を行いました。

2024 年 8 月には、甲佐町の谷田病院との連携も実現し、3 つ目の拠点となる「みどり保健室」をスタートさせました。甲佐町での取り組みでは、活動を始める前のニーズ調査から行うことで、これまで団体の課題でもあった仕組みづくりが進み、地域包括ケアシステム構築のための連携図を完成させることができました。

九州パンケーキとコラボしたイベントを開催

3つ目の拠点、甲佐町の「みどり保健室」

一般社団法人 看護のココロ
代表　蓑田由貴さん

13 NPO 法人 きらり水源村

#地域活性化
#産業創出
#目標設定
#域内での関係深化

地域との連携をより深め
木造校舎を地域活性の核となる施設に

■団体概要

組織名　NPO 法人 きらり水源村
所在地　菊池市原 1600
代表　岩崎修二
会員数　62 名
設立年月　2004 年 1 月

■主な活動内容

2000 年に廃校となった旧水源中学校の木造校舎を後世へ残すために、卒業生である地域住民によって設立。「きくちふるさと水源交流館」として改築された校舎を、菊池市の指定管理者である法人が管理・運営しています。宿泊はもちろん、地元食材を使った料理、弁当等も提供。里山の自然を活かしたさまざまな体験プログラムも好評です。

地域および団体の課題

旧水源中学校は、1950 年の校舎建設時に、基礎の一部を生徒たち自ら川から運んだ石で築くなど、地域住民にとってとても愛着のある建物です。廃校時に、当時 60 代で地域でも中心的役割を担っていた同校の卒業生らが中心となって、「木造校舎を残し、地域活性化に役立てたい」との思いで NPO 法人を立ち上げました。

その後、菊池市によって「きくちふるさと水源交流館」として活用が始まったあとは、同施設の指定管理業務が団体の主な活動となってきました。
それから 20 年以上が経過し、地域の人口減少や団体メンバーの高齢化が進んだのに加え、これまで市からの業務委託に頼りがちだった団体運営を、より自立したものにしていくための新たなビジョンの構築や地域の魅力に触れてもらう里山体験プログラムのブラッシュアップ、主体性のある法人運営のための体制づくりなどが必要な時期に差し掛かっていると感じています。

本事業で派遣した専門家との意見交換

課題解決への流れ

そうした課題を踏まえ、今後の団体運営を持続可能なものにするためには、「①法人運営の再デザインと「②安定した経営のためのノウハウづくり」が必要と考えました。その第一歩として、法人メンバーだけでなく地域住民にも広く意見を募り、今後の連携を図っていくために、「地域のこれからを考える意見交換会」を複数回開催しました。

そこで出た意見なども参考にしながら、①については、「木造校舎への地域意識の再興」「地域内に限定しない支援者づくり」「法人コンセプトの見直し」に取り組むことにしました。また、②については、「非営利事業と収益事業の取捨選択」「指定管理から市から施設を借り受けるという発想の転換」「経営的視点を持った外部支援者の必要性」などの方針を立てて、課題解決に向けた具体的な取り組みを模索することにしました。

活動を支える団体メンバーや地域の方々

具体的な取り組みや今後の活動予定

まずは、今後の団体運営の“出発点”となる法人のコンセプトづくりに着手し、「カラダよろこぶ×ココロきたえる」というキャッチコピーのもと、きらり水源村を「泊まれるアクティブヴィレッジ」と位置づけた新たなコンセプトを作成しました。

新しいコンセプトを地域の方々と共有することで、20 年前に法人を立ち上げたときの熱意を再び呼び起こすきっかけ（起爆剤）になればと願い取り組んで行こうと思います。また、新しいコンセプトは、地域外の支援者づくり (水源地区のファンづくり) にも役立つものです。少子高齢化が課題の地域にとっては、外部からの支援も大きな支えになります。

団体の拠点である水源交流館は、利用者の大半を「学校やスポーツ関連の子どもと主体とした団体」が占めています。利用者の空白部分である「大人の団体」へアピールする新しい取り組みとして、「里山研修プログラム」に取り組んでいます。これは、里山の自然や生業を感じながら行うチームビルディングプログラムです。交流館北側の体験エリアに、筑波大学体育系・渡邉助教授の指導を受け「ASE プログラム」の施設を建設しました。九州ではまだ認知度が高くない ASE ですが、JOC や JFA などのスポーツ団体からも支持されている野外体験プログラムです。2025 年度からは、この里山研修プログラムを収益事業へと育てていこうと考えています。

現在の施設利用の中心である子どもたちの里山体験

里山研修プログラムで提供する食事の試食会

NPO 法人 きらり水源村
松﨑勝己さん

14 一般社団法人 アコウプロジェクト

#地域活性化
#産業創出
#情報発信
#移住定住の促進

将来の移住者の増加を目指し
まずは「今できること」から取り組みを

■団体概要

組織名　一般社団法人 アコウプロジェクト
所在地　天草市御所浦町牧島 219-2
代　表　鍬崎智広
会員数　4 名
設立年月　2022 年 3 月

■主な活動内容

「御所浦地域を 100 年後も持続可能な地域にすること」を目的に 2022 年に設立。①御所浦地域への移住定住サポート事業　②地域の空き家問題解決及び空き家利活用促進事業　③地域の関係人口・交流人口の拡大事業などに取り組んでいます。また、2024 年 3 月に「恐竜の島博物館」がリニューアルオープンしたことに伴い、隣接する倉庫を改装して「恐竜グルメ倉庫」をオープンし、アコウプロジェクトで運営しています。

地域および団体の課題

八代海に浮かぶ天草市の離島・御所浦。現在、約 2,200 人が暮らしていますが、65 歳以上の人口が 55%を超える限界集落で、年間 100 人程度ずつ人口が減少しています。また、島内には約 400 軒の空き家があるなど、さまざまな課題を抱えています。

その一方で、2024 年 3 月にリニューアルオープンした「恐竜の島博物館」は、島の新たな観光の目玉として期待され、実際に夏休みなどを中心に多くの家族連れが訪れて、島は賑わいを見せています。しかし、島内には観光客を受け入れる宿泊施設や飲食店が不足しているほか、島内でまちおこしに関わる人材の不足や高齢化が課題になっています。

「恐竜の島博物館」が起爆剤となり、「御所浦」に注目が集まっている千載一遇のチャンスともいえるタイミングにも関わらず、このままでは関係・交流人口増や、それをきっかけにした移住者増につながる機会を逃すことになってしまうのではと危惧していました。

2024 年 3 月にリニューアルオープンした「恐竜の島博物館」

課題解決への流れ

アコウプロジェクトの設立以降、これまでに島内の空き家の利活用や移住サイトの制作、移住者を増やすための仕事の創出など、さまざまな試行錯誤を繰り返してきましたが、どれもまだまだ成果が出るという状態には至っていません。

また、「恐竜の島博物館」オープンによって注目を集めているとはいえ、御所浦自体の認知度はまだまだ低く、県内の他の観光地のように多くの人に訪れてもらうには、島の外に出て行ってのプロモーションが必要だと感じていました。

そこで、解決すべき課題を、①地域の認知度を上げる PR イベントのパッケージ化　②既存事業 (恐竜グルメ倉庫の運営／空き家問題への取り組み) のブラッシュアップ　③持続的な団体運営のための具体策という 3 つに絞り、それぞれに団体メンバーだけでなく、地域の商工業者、行政なども巻き込みながら取り組むことにしました。

化石採集体験場の視察

具体的な取り組みや今後の活動予定

御所浦の認知度向上のための PR イベントは、「ごしょんなキャラバン」と銘打った PR イベントを熊本市中心市街地のびぷれす広場で開催 (2025 年 2 月 1 日・2 日)。御所浦の最大の“売り”である恐竜を全面に出し、化石採集体験などを実施したことで、2 日間で 400 人を超える来場者がありました。イベントの企画や準備、島内関係者との協力体制の構築、飲食を提供する際の許可申請など、今後も継続的に PR イベントを実施するに当たって役立つさまざまなノウハウを得る貴重な場になりました。加えて、化石採集体験の申込時に実施したアンケートも、100 サンプル以上集まり、実際の数字として御所浦の認知度などを把握することができました。

また、恐竜グルメ倉庫のブラッシュアップについては、専門家による現地視察や試食会を実施。現在のバーガー中心のメニューに加え、コスパや提供スピードを重視したカレーなどを加えることで、観光客だけでなく地域住民が日常的に利用できる飲食店になり、安定した売り上げにもつながるのではとのアドバイスを受けました。これを踏まえ、2025 年度から取り組む予定です。

さらに、空き家の利活用でアドバイスを受けた民間企業との縁がつながり、今後、連携して御所浦の宿泊施設の整備や、空き家利活用の拠点整備を進めていくことになりました。

「恐竜グルメ倉庫」で提供している鯛カツバーガー

びぷれす広場で開催した「ごしょんなキャラバン」の様子

一般社団法人 アコウプロジェクト
代表　鍬崎智広さん

15 一般財団法人 たらぎまちづくり推進機構

#地域活性化
#資金調達 (ふるさと納税)
#域内での関係深化
#目標設定

地域の困りごとの事業化など
団体の活動を新たなフェーズへ

■団体概要

組織名　一般財団法人 たらぎまちづくり推進機構
所在地　球磨郡多良木町多良木 730-3
代　表　明石照久
会員数　8 名
設立年月　2020 年 10 月

■主な活動内容

「持続可能なまちづくり」の実現を目指して多良木町の 100%出資で設立され、町内の空き店舗を活用した事務所を拠点に活動を展開しています。「人材育成」「商品高度化」「ふるさと納税」を事業の 3 つの柱としつつ、移住定住促進コーディネート業務や湯前小・中学校 ICT 支援業務、JICA 海外協力隊グローカルプログラム実習生受け入れ、大学との連携プログラムなど、多様な取り組みを実施しています。

地域および団体の課題

熊本県の南東部に位置する多良木町は、人口約 8,300 人で町内には国指定の文化財もあるなど風情ある町です。一方で、多くの町村同様、人口減少や高齢化が進んでおり、地域の活力維持や町の将来を担う人材の育成などが課題となっています。

2020 年に設立された「たらぎまちづくり推進機構」は、地域のハブ (繋ぎ手) として多良木町と都市部の企業や人材を繋ぎ、地域にワクワクを創出することを目指し、さまざまな事業に取り組んできました。

その一方で設立から 4 年が経過し、今後の中長期的な団体の展望を考えた時に、経営基盤の強化をはじめ、組織運営の人材確保や自社商品の販路拡大、新規事業の選定といった課題を抱えています。そのため、財政面での町からの自立も含め、団体として次のフェーズ (段階) に進むべき時期にきていると感じていました。

元スーパーマーケットだった店舗を拠点として活用

課題解決への流れ

団体としてさまざまな課題がある中で、まず取り組むべきものとして挙げたのが、「認知度の向上」と「中長期の計画策定」です。

「たらぎまちづくり推進機構」では、設立当初から国の地方創生推進交付金などを活用し、外部の企業や人材とさまざまな事業に取り組んできました。一方で、町民からは「どんな仕事をしているのか?」と尋ねられることも少なくありません。これからの活動を“第 2 フェーズ”と考えた場合、今後はより一層町内や人吉球磨地域へ目を向ける必要性を感じています。そこで、地域の声に耳を傾け、地域の課題・困りごとの解決にも取り組んでいきたいと考えています。

また、これまでも団体としての理念やビジョンはあったものの、次の段階に進むに当たってもっと分かりやすい中長期のプランが必要だと認識しており、計画づくりに着手しました。

課題抽出のために何度も重ねた話し合い

具体的な取り組みや今後の活動予定

まず、団体としてのコンセプトとビジョンを再定義し、「多良木わくわくテーブル (仮)」としてまとめました。さまざまな年代や地域、性別、立場を超えて、多様なテーマで交流できる“場”として形を決めない自由で柔軟な「テーブル」をイメージしました。

「多良木わくわくテーブル (仮)」の中では、中長期計画のビジョンとして、①地域にえがく未来に、わくわく。②私たちがであう明日に、わくわく。　③みんなの今日のえがおに、わくわく。の 3 つを挙げています。

一つ目には、長期的なビジョンとして今後どのような多良木町になっていって欲しいのかを皆で考えたいとの思いを込めました。二つ目は、特に若い世代に向けた中期的なビジョンで、近い将来の自分を想像し、自分自身を成長させることにワクワクしてほしいという思いです。三つ目は、地域の皆さんの笑顔をつくるためのコミュニティ作りやイベントを企画していくというビジョンです。

こうした新たなビジョンを踏まえ、今後、「たらぎまちづくり推進機構」では、既存事業のブラッシュアップと新規事業を展開していきます。例えば、団体の運営資金の一部にもなっている「ふるさと納税」では、寄付額増に向けて地域性・ストーリー性のある新商品の開発に取り組みます。また、「困りごと相談」では地元農家や事業所などにヒアリングを行う予定です。さらに、イベントやワークショップの開催を通して、地域の方々に気軽に立ち寄ってもらえるような「施設の利活用」を図っていこうと考えています。

ふるさと納税額アップのために商品のブラッシュアップも

コワーキングスペースの活用も取り組む予定

一般財団法人
たらぎまちづくり推進機構
代表理事　明石照久さん

16 立野わかもん会

#地域活性化
#合意形成
#目標設定
#域内外との関係深化

メンバー間で理念や目的を共有し 再び地域での活動を活性化へ！

■団体概要

組織名　立野わかもん会
所在地　南阿蘇村大字立野 1532-7
代　表　郷 聖典
会員数　21 名
設立年月　2018 年 9 月

■主な活動内容

熊本地震の影響で住民が減り、地域の活気が失われている南阿蘇村立野地区で、「かつての賑わいを取り戻したい」という熱い思いを持った地元の若者たちが 2018 年に立ち上げた「立野わかもん会」。南阿蘇鉄道全線運転再開時や阿蘇立野ダムの試験湛水時など、地域の節目のイベントでマルシェやフットパス、夏祭りを開催するなど、地域にとって欠かせない存在になっています。

地域および団体の課題

熊本地震によって甚大な被害を受けた南阿蘇村の立野地区では、交流施設の完成および南阿蘇鉄道の全線再開、阿蘇立野ダムの完成、阿蘇立野ダム展望施設および広場の整備など、地域の再生に不可欠な事業が続々と完成を迎えています。

その一方で、世帯数は震災前の約半分にまで減少しています。特に子育て世代の減少 (流出) が顕著で、その結果、高齢化が進んでいます。このままでは数年後には、地域で実施している祭りの継続や除草作業なども継続していくことが難しいことが推測されます。

また、団体としても高齢化によるメンバーの減少 (設立時約 40 名→現在約 20 名) や、復興の進展やコロナ禍に伴うモチベーションの低下・活動目的の希薄化、地区内で整備されるさまざまな施設を活用した取り組みに不可欠な国や村との連携強化などの課題がありました。

熊本地震からの復興が進む立野地区

課題解決への流れ

まずはメンバー間での話し合いの場を設け、それぞれが今後、団体での活動を通じてどんなことをやりたいかを探りました。その中では、「地域住民を繋げ、人口減少に対応できる新たなコミュニティを構築したい」「参加者も自分たちも楽しいと思えることがしたい」「復興した立野地域を多くの人に見に来てほしい」「阿蘇立野ダムや周辺に整備される展望施設を活用したイベントを開催したい」などの意見が挙がりました。

こうした意見交換を行ったことで、改めて各メンバーが「立野わかもん会として、立野地域を盛り上げたい」という思いを持っていることを再認識することができ、団体としても前に進むことができると感じました。

それを踏まえ、団体として直近で取り組むこととして、2025 年春の阿蘇立野ダムの展望施設完成に合わせ、4 月にフットパスイベントを開催して、さらに、夏には地域の夏祭りを実施することにしました。

フットパスイベントに向けたコース設定

具体的な取り組みや今後の活動予定

今後の取り組みの一つ目である「フットパスイベント」については、コース、イベント内容、周知方法などをメンバー間で話し合い、立野地区の食体験や阿蘇立野ダムなどの見学、震災からの復興の様子が見える新阿蘇大橋などの見学、ダム周辺から南阿蘇鉄道が運行しているトロッコ列車を眺めるなど、今の立野地区でしか体験できない内容とコース設定を行いました。

また、このフットパスイベントの準備の段階で、国や村との調整が必要なことが多く、そうしたやり取りを通じて、これまで団体の課題の一つであった国や村との連携向上が進む結果となりました。この経験をもとに、今夏予定している夏祭りの開催など、今後新たにイベント等を計画する際にも、さらに連携を深めていきたいと考えています。

加えて、今回課題解決の第一歩として行ったメンバー間の意見交換が、団体の活動を見つめ直すよいきっかけになったことを踏まえ、新たな活動方針を決めることにしました。今後、団体として持続的に活動を続けていく上で、単にイベントの企画・運営を行うだけでなく、地域の将来像と自分たちの活動をどうつなげていくかを話し合い、今春以降の策定を予定しています。

柴田先生を交えた意見交換が転機に

かつて行っていたマルシェイベントなども今後のイベントの参考に

立野わかもん会
代表　郷 聖典さん

地域づくりに役立つ情報ページ

「地域の課題解決に取り組みたい」「自分たちで地域団体を立ち上げたい」など、皆さんがさまざまな形で地域づくり活動に関わりたいと思ったときに役立つ情報が手に入るウェブサイトなどを紹介します。

国

○総務省
地域力の創造・地方の再生

○総務省
地域人材ネット（地域力創造アドバイザー）

○総務省
ふるさとづくり大賞

○国土交通省
地方振興 活力と魅力のある地域づくり

○国土交通省
地域づくり表彰

○内閣府
NPO 法人ポータルサイト

県

○熊本県　地域振興課

○熊本県　むらづくり課

その他

○一般財団法人地域活性化センター

○火の国未来づくりネットワーク

○くまもと地域おこし協力隊ネットワーク

○くまもと県民交流館　パレア

○ NHK 地域づくりアーカイブス

MEMO

P.6 ～ p.10 を参考に、検討した結果をまとめて記録しましょう。

目標設定

合意形成

賛同者集め

組織化・規約策定

資金調達

その他

地域課題解決プロデューサー人材活用事業

地域づくり＋（プラス）

熊本県企画振興部 地域振興・世界遺産推進局 地域振興課
TEL 096-333-2155

発 行 者 ：熊本県
所　　属 ：地域振興課
発行年度 ：令和 6 年度